

タイトル「**2022年度危機管理学部(公開)**」、フォルダ「**危機管理学部**」
シラバスの詳細は以下となります。



科目ナンバー	RMGT4602		
科目名	ゼミナールⅡ		
担当教員	川中 敬一		
対象学年	3年,4年	開講学期	後期
曜日・時限	火 4		
講義室	1313	単位区分	選必
授業形態	演習	単位数	2
科目大分類	専門		
科目中分類	専門統合		
科目小分類	専門統合・演習		
科目の位置付け（開発能力）	<p>■DPコード-学修のゴールを示すディプロマポリシーとの関連</p> <p>DP1-E〔学識・専門技能〕 専門分野にかかる理論知と実践知を獲得し利用することができる。</p> <p>DP4-F〔探求力・課題解決力〕 問を設定し又は論点を特定し、それに対する答・結論・判断を合理的に導くために、論拠の収集と分析を体系的に行うとともに、オープンエンドな問題・課題に答えるための方略をデザインし、検証し実行することができる。</p> <p>DP3-G〔状況把握力・判断力〕 自らの置かれた状況、及び自己が帰属する集団の内外の状況を的確に把握し、適切に対応することができる。</p> <p>DP4-I〔理解力・分析力〕 文章表現、数値データを適切に扱いつつ、情報の収集と取舍選択、分析と加工を有効かつ円滑に行い、課題の解決につなげることができる。</p> <p>DP6-K〔表現力・対話力〕 文章及び口頭で、自らの考えを的確に表現し、他者に過不足なく伝達することができる。</p> <p>DP7-C〔他者理解・倫理観・公共心〕 人間の行動の正誤に関する推論に正面から取り組み、社会的な存在としての自己の行動原理を獲得することができる。</p> <p>DP7-L〔協働力・牽引力〕 集団的に課題解決を行う際に、自己の立場や責任を認識し、互いに集団の連帯を強めることができる。</p> <p>DP8-M〔省察力〕 知識と経験とを関連付け学修成果を活用可能な状態に高めるとともに、これを新しく複雑な状況に転移させ課題解決につなげることができる。</p> <p>■CRコード-学修を通じて開発するマインドセット・ナレッジ・スキルを示すコモンルーブリック（CR）との関連</p> <p>B1 自己啓発（5%） C1 倫理的思考・社会認識（5%） E1 学識と専門技能（15%） F1 探求と論拠（5%） F2 課題解決（5%） G1 状況把握（10%） I1 理解・分析と読解（5%） I3 情報分析（5%） K1 ライティング・コミュニケーション（10%） K2 オーラル・コミュニケーション（10%） L1 チームワーク（15%） M1 統合的・応用的学修（10%）</p>		
教員の実務経験	<p>防衛省本省及び研究機関、並びに、自衛隊上級司令部幕僚、部隊指揮官、防衛大学校教官等勤務、そして、周辺諸国の国家・軍事戦略の研究と対謀略活動を含む情報活動を加えて30余年勤務してきました。この職務上の経験を通じて、国際関係においては、文化、経済と軍事とが密接に絡み合い、それが政治活動の原動力となっている現実を痛感しました。こうした経験</p>		

	に基づいて、日本ではあまり顧みられない軍事を視野に入れたトータル・グローバルズムを考えていきたいと思えます。(第4及び5回)
成績ターゲット区分	■成績ターゲット 3 発展期 ~ 4 定着期
科目概要・キーワード	危機管理とその基礎となる法学に関する専門的な研究活動を実践するために、必要な研究の手法を学び、学生自らが個人の研究テーマを設定し、研究論文を執筆するための指導を行います。ここでは、卒業論文につながる個人研究に関する研究方法、調査手段などを確立するために、その学術的方法論の検討と指導を行います。授業形態は演習形式により行います。なお、対応するコンピテンスに基づき効果的な授業方法として、又は各授業を補完・代替するためのオンライン授業を一部取り入れる場合があります。 ■キーワード； 淵源と経緯、不変と可変、多面と立体
授業の趣旨	■副題 国内外冷戦と今日の諸情勢との連続部分と断絶部分とを判別して、将来動向予測の尺度の精度を向上させると同時に、近現代中国の変動を貫徹する理念を理解することにより、隣国である超大国の行動原理を分析します。 ■授業の目的 以下、2点を授業の目的とします。 ① 過去と現在との接続部分と変容部分とを判別することにより、将来動向予測の尺度の精度向上を図ります。 ② 卒業研究活動の方向性を確定し、それを基盤とした論文執筆を開始しながら、常時、研究活動の適否を見つめ直します。 ■授業のポイント ① 授業内容に示される指針に従い、予習で作成した成果物を教員に指名された学生が発表し、それに対して他学生は自身の所見を発言します。 ② 教員及び他学生の指導・指摘等を予習の成果に還元し修正します。 ③ 卒業研究活動に関しては、研究計画書を確定後、論文執筆に取り掛かり、逐次、教員の指導を受けるとともに、指定回次には成果を所定時間内に口頭とレジュメにより発表します。 ④ 発表時における教員の指導・助言、他学生の指摘を参考にして、研究目的達成に逐次努めることとします。
総合到達目標	■学生は、現今国内外情勢の淵源たる冷戦構造に関する概略の流れと知識を基盤として、現在可視的状态にある各種現象の定位と将来動向を予察する能力を修得することができる。 (1)学生は、冷戦構造の全体像と、今日の国際的現象にどのような形態で影響を及ぼしているのかを説明することができる。(第2～4回) (2)学生は、冷戦構造が日本国内へどのような形態で表出し、今日の国内現象に及ぼした影響を具体的に説明することができる。(第5及び6回) (3)学生は、中国における冷戦構造が及ぼした影響と、中国独自の動向との関係を具体的に説明することができる。(第8～12回) (4)学生は、日本・アメリカ・中国との関係における冷戦構造が及ぼした具体的事例を説明することができる。(第13回) ■学生は、ゼミナールI及びIIで得る知識と視点を駆使して、卒業研究に関わる自身の関心における結着点の具体像を描くことができる。 ・各回授業で修得した歴史的アプローチを参考として、自己の卒業研究に関する計画確定を通じ、現状の意義と将来を予測する高精度の尺度構築の基盤を確立できる。 ■学生は、自身の関心事を解明するに際して、有用な資料を判別する基準を体得することができる。 ・学生は、指導教員の助言を参考として、自己の卒業研究に寄与する資料を選択することができる。(第7、14及び15回)
成績評価方法	■レポート12回(60%)：適用ルーブリック E1・F1・F2・I1・I3・K1・K2・M1 (評価の観点) 第1に、読書指定箇所の要旨を把握し、教員による指示事項に沿って課題に取り組んだかを評価します。第2に、指名された学生の報告に対して建設的な指摘をしたかを評価します。 (フィードバックの方法) 授業中における教員の指導及び他学生の指摘をもって、予習で作成した成果物を加筆・修正のための参考を提供します。 ■学生発表4回(40%)：適用ルーブリック B1・C1・E1・G1・L1 (評価の観点) 卒業研究に関する報告を十分かつ適切に準備し実行できたか、司会を効果的に実施できたかの2点を評価します。 (フィードバックの方法) 教員の指導・助言及び他学生の指摘をもって、発表成果の加筆、修正、研究活動及び論文の完成度向上のための参考を提供します。

履修条件	ゼミナールⅠ（RMGT4601）を履修していること。	
履修上の注意点	<p>■ 指定読書の課題答申については、「速読」の習慣を体得してください。多くの情報から、自身の目的に合致した情報を迅速に峻別し、そこから課題解決のための考察ができるためには、速読の習慣が必須となります。また、この段階で指定読書の課題答申において要求されるのは、課題に対する自身の「考察」が中心となっていることです。</p> <p>■ 卒業研究に関しては、「研究目的の明確化・具体化」を最優先してください。自身の研究活動における終着点、どのような姿であるのかを常に意識することが肝要です。「美しい言葉」であっても、内容が茫漠としていると、いたずらに時間と労力を浪費するばかりとなります。そして、研究目的が自身の中で明確化・具体化されたならば、どのような「ストーリー（構成）」で論文を構成するかを簡潔に決定してください。ストーリーを決定したならば、直ちに論文執筆に取り掛かってください。こうした研究（論文執筆）の骨格に合致した資料を収集することが、その後の研究活動を効率化させる要点であることを認識してください。</p> <p>■ 論文執筆の「迷宮」に迷い込まないためには、第三者（教員及び他学生）に自身の成果（出来高）をこまめに聞いてもらうことが、最も効率的であることを認識してください。途中成果報告は、教員や他学生の評価を得ることではなく、自身の研究活動の適否を自覚する機会であるということです。そして、第三者の指導や指摘は、必ず記録し、可能な限り早期に各時点の成果に反映させることを強く推奨します。</p> <p>■ 卒業研究に関わる発表においては、司会を務める学生の役割が大きいことを自覚してください。限定された時間に、できるだけ多くの学生から多くの指摘を引き出すことが、発表学生の研究にとり、たいへん有為であることを認識して、司会学生は時間を運用してください。</p>	
授業内容	回	内容
	1	<p>①授業テーマ ガイダンス（授業の意義、授業の進行方式、成績評価、学生個人研究の説明・指導等）、学生発表（修正卒業研究テーマ、研究目的、使用予定資料、論文構成素案）</p> <p>②授業概要 （ガイダンス）学生は、ゼミナールⅠとⅡとの関連、ゼミナールⅡの予習・復習の具体的な進め方、卒業研究実施要領及び評価の基準（学生発表準備と成果活用結果）を確認する。 （学生発表）学生は、ゼミナールⅠ第15回授業における本ゼミナール専用ノートを参考にして、卒業研究計画（修正テーマ、研究目的、論文構成の素案、使用予定資料及び研究活動実行予定等）を作成し発表することにより、自己の卒業研究活動の明確化と効率化を図ることができる。</p> <p>③予習（180分） 研究計画書（第1案）をゼミナールⅠにおける教員からの指導・助言及び学友からの指摘を参考としてA4版2枚程度で作成し、教員及び他学友分のコピーを準備する。</p> <p>④復習（60分） 授業における教員による指導・助言及び学友からの指摘等を参考として、卒業研究計画書第2案の素案を構想し、ゼミナール専用ノートに記録する。</p>
	2	<p>①授業テーマ 冷戦の起源から米世界とアジア地域との冷戦に対する認識の齟齬</p> <p>②授業概要 学生は、冷戦の起源を説明できるとともに、欧米世界と中国を中心とするアジア地域とにおける冷戦に対する認識の乖離を、その理由とともに論理的に説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（120分） 教科書『冷戦史』（iv～Xiv頁及び4～61頁）を読書し、A4版1枚程度に、冷戦初期における欧米世界とアジア地域との認識の相違を理由を付して論述する。</p> <p>④復習（120分） 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
	3	<p>①授業テーマ 冷戦中期（1950年代中盤～1970年代中盤）における冷戦構造と民族主義との軋轢</p> <p>②授業概要 学生は、冷戦中期において表出した米ソ欧州における冷戦への視点と、中国を中心とするアジア地域を初めとする第三世界におけるそれとの乖離の原因を具体例を挙げて論理的に説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（120分） 教科書『冷戦史』（114～161頁）を読書し、A4版1枚程度に、冷戦中期における米ソの視点と第三世界との視点の乖離を中ソ対立を事例として、その原因を論述する。</p>

	<p>④復習 (120分) 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
4	<p>①授業テーマ 冷戦後期 (1970年代中盤～1990年代前半) における世界戦略構造の変容</p> <p>②授業概要 学生は、冷戦後期において、米ソの戦略的目標と中台の戦略的目標との変容した部分と不変であった部分とを、それぞれ具体的、かつ、論理的に説明することができる。また、学生は、その米ソと中台との齟齬が、冷戦後に及ぼした影響を具体例を挙げて説明することができる。(E1・I1・K1・K2) なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 また、担当教員が実際に手がけた北朝鮮工作船事案や湾岸戦争に関する実務の実態を重点として講義します。</p> <p>③予習 (180分) 教科書『冷戦史』(210～262頁) を読書し、A4版1枚程度に、冷戦後期において、米ソの戦略的目標と中台の戦略的目標との変容した部分と不変であった部分とを、それぞれ具体例を付して表にまとめる。また、学生は、この齟齬が、冷戦後の淵源を構成していると思われる現在の情勢を具体例を挙げて記述する。</p> <p>④復習 (60分) 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
5	<p>①授業テーマ 冷戦初期及び中期における日本国内の政治的対立と国防問題</p> <p>②授業概要 学生は、敗戦前後における日本の指導者達にとり、保持することに妥協できなかったものは何で、何は放棄しても容認できたのか、その思惑はどこに所在していたのかを、連合軍占領期から高度経済成長期にかけての期間における諸事象から、論理的かつ明解に説明することができる。(E1・I1・K1・K2) なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。 また、当該時期以降、突如として日本の一部でわき起こった「にわか国防論」の危うさを担当教員の実務経験によった知見に基づいて、昨今の防衛問題に関する議論や動向の危うさを考えていきます。</p> <p>③予習 (180分) 教科書『冷戦史』(64～109頁及び164～205頁) を読書し、保守と革新ともに積極的に自主防衛体制を構築する意欲に乏しかった理由を考察し、理由を付してA4版1枚程度に所見を論述する。</p> <p>④復習 (60分) 授業における教員の解説を参考として、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
6	<p>①授業テーマ 冷戦初期及び中期と冷戦後期における国内政治構造の変容部分と不変部分との峻別</p> <p>②授業概要 学生は、冷戦初期及び中期と冷戦後期における国内政治構造の変容部分と不変部分とを具体例を挙げて、その理由を付して分類し論理的に説明し、併せて、その事実が今日の日本国内情勢へいかなる形態で影響を与えているかを考察し説明できる。(E1・I1・K1・K2) なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習 (120分) 教科書『冷戦史』(264～329頁) を読書し、冷戦初期及び中期と冷戦後期における国内政治構造の変容部分と不変部分を、その変化の態様に帰着した理由を付して分類し表にまとめる。</p> <p>④復習 (120分) 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
7	<p>①授業テーマ 卒業研究計画書の確定</p> <p>②授業概要 学生は、ゼミナールⅡ第1回次授業で作成した素案を基に、卒業研究計画書を確定し、爾後の研究活動の本格的始動の明確な方向性を得ることができる。(B1・E1・F1・F2・G1・K1・K2・L1) なお、発表は、教員から指名された学生の司会の下で実施する形態をとる。</p> <p>③予習 (120分) 研究計画書第2案をA4版2枚程度で作成し、教員及び他学生への説明用としてコピー</p>

	<p>し準備する。なお、計画書の内容は、第1回次授業で示したとおり。</p> <p>④復習（120分） 授業中における教員による指導・助言及び他学生からの指摘を参考に、予習で作成した計画書を加筆・修正して研究計画書を完成させる。以後は、特に授業内予定で示されなくても、学生は、日常的に卒業研究活動と卒業論文の執筆を継続させる。</p>
8	<p>①授業テーマ 中国ナショナリズムを通じて理解する中国の発展衝動における深層（1）</p> <p>②授業概要 学生は、中国の対内対外的ダイナミズムの源泉であるナショナリズムが、清末から中華人民共和国成立までに、どのような変質を経てきたのか、何は一貫していたのかを説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（180分） 教科書『中国ナショナリズム』（1～59頁）を読書し、清朝末期、中華民国前期（辛亥革命～五・四運動）、中華民国後期（五・四運動～台湾逃潰）及び中華人民共和国期のそれぞれにおけるナショナリズムの特徴を表にまとめる。</p> <p>④復習（60分） 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成した「表」を加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
9	<p>①授業テーマ 中国ナショナリズムを通じて理解する中国の発展衝動における深層（2）</p> <p>②授業概要 学生は、冷戦期において中国が独自の歩みをしたその目的は何であり、改革開放以後も継承されたものは何かを説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（180分） 教科書『中国ナショナリズム』（60～93頁）を読書し、冷戦期中期までにおける中国の独自路線を具体例を複数挙げてその目的をA4版1枚にまとめ、その現在に至るまで継承されているものを付記する。</p> <p>④復習（60分） 授業における教員の解説を参考として、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
10	<p>①授業テーマ 中国ナショナリズムを通じて理解する中国の発展衝動における深層（3）</p> <p>②授業概要 学生は、近代中国革命における革命と党が果たした役割を説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（180分） 教科書『中国ナショナリズム』（97～131頁）を読書し、国民党と共産党それぞれの果たした功罪を表にまとめる。</p> <p>④復習（60分） 授業における教員の解説を参考として、読書指定箇所を再読のうえ、予習で作成した「表」を加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
11	<p>①授業テーマ 中国ナショナリズムを通じて理解する中国の発展衝動における深層（4）</p> <p>②授業概要 学生は、近現代中国の国家体制における帝國的要素が継承された部分を理由を付して具体的に説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1回次授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習（180分） 教科書『中国ナショナリズム』（132～151頁）を読書し、A4版1枚に近現代中国の国家体制における帝國的要素が継承された部分を理由を付して具体的に記述する。</p> <p>④復習（60分） 授業における教員の解説を参考として、予習で作成したペーパーを加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
12	<p>①授業テーマ 中国ナショナリズムを通じて理解する中国の発展衝動における深層（5）</p> <p>②授業概要 学生は、孫文、毛沢東、鄧小平という3人の革命家に共通する理念と、異なる思考形式を具体的に説明することができる。（E1・I1・K1・K2）なお、説明は、第1</p>

	<p>③予習 (180分)</p> <p>教科書『中国ナショナリズム』(155～208頁)を讀書し、孫文、毛沢東、鄧小平それぞれの革命理念を表にまとめ、その共通点と相違点を付記する。</p> <p>④復習 (60分)</p> <p>授業における教員の解説を参考として、讀書指定箇所を再読のうえ、予習で作成した「表」を加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
13	<p>①授業テーマ</p> <p>日本と中国とアメリカの国家としての生き様の相違</p> <p>②授業概要</p> <p>学生は、第2次世界大戦後の日米中各国の国家としての生き様の相違と共通性を、国防努力を中心として具体的、かつ、論理的に説明することができる。(E1・I1・K1・K2・M1)なお、説明は、第1回授業で教員から提示される課題に対して、指名学生の司会の下で答申する形態をとる。</p> <p>③予習 (180分)</p> <p>日米中各国の国防努力、外交活動、政治理念それぞれの側面から特徴を表にまとめ、それぞれが、なぜそのようになったのかという理由を付記する。</p> <p>④復習 (120分)</p> <p>授業における教員の解説を参考として、予習で作成した「表」を加筆・修正して、ゼミナール専用ノートに添付する。</p>
14	<p>①授業テーマ</p> <p>卒業研究経過報告(第1回)</p> <p>②授業概要</p> <p>学生は、第7回授業の復習で完成させた研究計画書に基づき、具体的な研究活動の途中経過報告発表を行うことにより、爾後の研究活動(論文執筆)における手法と方向性を修正することができる。なお、今回回は、指定された半数の学生が1人当たり10分間以内で発表を完了する。</p> <p>③予習 (120分)</p> <p>第7回以降に執筆してきた卒業論文を再考し、より完成度を高めたいうえで論文自体とそのレジュメの教員及び他学生用のコピーを準備する。</p> <p>④復習 (120分)</p> <p>授業中における教員による指導・助言及び他学生からの指摘を参考に、予習で作成した論文を加筆・修正して完成度を向上させる。以後は、特に授業内予定で示されなくても、学生は、日常的に卒業研究活動と卒業論文の執筆を継続させる。</p>
15	<p>①授業テーマ</p> <p>卒業研究経過報告(第1回)</p> <p>②授業概要</p> <p>学生は、第7回授業の復習で完成させた研究計画書に基づき、具体的な研究活動の途中経過報告発表を行うことにより、爾後の研究活動(論文執筆)における手法と方向性を修正することができる。なお、今回回は、第14回授業で未発表の学生が1人当たり10分間以内で発表を完了する。</p> <p>③予習 (120分)</p> <p>第7回以降に執筆してきた卒業論文を再考し、より完成度を高めたいうえで論文自体とそのレジュメの教員及び他学生用のコピーを準備する。</p> <p>④復習 (120分)</p> <p>授業中における教員による指導・助言及び他学生からの指摘を参考に、予習で作成した論文を加筆・修正して完成度を向上させる。以後は、特に授業内予定で示されなくても、学生は、日常的に卒業研究活動と卒業論文の執筆を継続させる。</p>
関連科目	危機管理基礎演習Ⅰ(RMGT2601)、ゼミナールⅠ(RMGT4601)、ゼミナールⅢ(RMGT4603)、ゼミナールⅣ(RMGT4604)
教科書	(1) 松岡完、広瀬佳一、竹中佳彦、中島治久『冷戦史』同文館出版、2003年、ISBN:4-495-46331-4(定価:2,900円(税別))
参考書・参考URL	<p>以下の他、授業中に逐次、教員から別途案内します。</p> <p>(1) 楠綾子『現代日本政治史① 占領から独立へ』吉川弘文館、2013年、ISBN:978-4-642-06435-4(定価:2,600円(税抜))</p> <p>(2) 池田慎太郎『現代日本政治史② 独立完成への苦闘』吉川弘文館、2012年、ISBN:978-4-642-06436-1(定価:1,800円(税抜))</p> <p>(3) 中島琢磨『現代日本政治史③ 高度成長と沖縄返還』吉川弘文館、2012年、ISBN:978-4-642-06437-8(定価:2,100円(税抜))</p> <p>(4) 若月秀和『現代日本政治史④ 大日本国の政治指導』吉川弘文館、2012年、ISBN:978-4-642-06438-5(定価:2,100円(税抜))</p>

	<p>(5) 佐藤明広『現代日本政治史⑤ 「改革」政治の混迷』吉川弘文館、2012年、ISBN:978-4-642-06439-2 (定価:1,900円(税抜))</p> <p>(6) 横山宏章『中国の愚民主義』平凡社、2014年、ISBN 978-4-582-85729-0</p> <p>(7) 北村稔『現代中国を形成した二大政党制』ウェッジ、2011年、ISBN 978-4-86310-0886</p> <p>(8) 石井明『中国国境熱戦の跡』岩波書店、2014年、ISBN 978-4-00-029141-5</p> <p>(9) 佐藤望『アカデミック・スキルズ』慶應義塾大学出版会、2006年、ISBN:978-4-7664-1960-3 (定価:1,000円(税別))</p> <p>(10) 磯崎陽輔『分かりやすい公用文の書き方 改訂版(増補)』ぎょうせい、2018年、ISBN:978-4-324-10525-2 (定価:2,000円(税別))</p>
連絡先・オフィスアワー	<p>■連絡先 開講時に告知します。</p> <p>■オフィスアワー 火曜日3限。それ以外の時間については、メール等で事前にアポイントをとることにより研究室等で対応します。</p>
研究比率	<p>■危機管理領域との対応 災害マネジメント30% : パブリックセキュリティ30% : グローバルセキュリティ40% : 情報セキュリティ0%</p> <p>■危機管理学と法学とのバランス 危機管理学90% : 法学10%</p>

